

なぜ、私は学校史に関心を抱いたか

学院史編纂室主任研究員（元経済学部教員） 井上 琢智

I. 学校史への私的関心

関西学院大学経済学部・同大学院研究科博士課程を出て、1976年4月、大阪商業大学商経学部の経済思想史担当の専任講師となった。大学・大学院時代は、大学闘争と「関西学院大学改革に関する〔小寺武一郎〕学長代行提案」に沿った改革の時代であった。この改革時代の1971年12月には学内の差別発言に関する公開質問状が部落問題研究部より出されたことを契機に人権問題の研究と教育が本格化した。

大阪商業大学時代、給与・研究条件改善を求める組合運動に参加し、書記長として編集・校正を担い『みんなで大阪商業大学教職員組合15年史』（1981）を刊行した。他方、同志社で経済学をも教えたD・W・ラーネツドつねてるの『経済新論』（1884）を邦訳した同校出身の牧師宮川経輝が1886年に設立し、内村鑑三も務めた泰西学館を調査・研究した（本校の経営を大阪商業大学が引受けた）。さらに大阪川口居留地に設立されたミッション・スクールの調査・研究のため川口居留地研究会を仲間とともに組織し、『大阪川口居留地の研究』（1995）を刊行した。この研究会の関連研究である大学史研究会（1998）や神戸外国人居留地研究会（1999）に参加した。

II. 関西学院史への関心

(1) 『関西学院組合史』編纂への参加

1985年4月、関西学院大学経済学部に移籍した。関西学院教職員協議会の「組合員ノートに関する委員会」の答申にそって旧『組合員ノート』は学内の例規集と歴史とに分離され、前者は『あすく』（1987）として出版され、後者は1988年から編集委員会による編集が開始され、おそらくは外部の教員組合の活動で知り合っていた当時の関西学院教職員協議会の専従からの推薦があったためだと推測するのだが、私も同委員会委員に就任し、最終的に委員長として『あすく 別冊 組合活動の記録 1946-1989』（1990）を刊行した。

(2) 『関西学院の100年』へのコメント

他方、関西学院の創立百周年の記念出版のための記念出版専門委員会は1987年12月に開催され、1989年11月に図録『関西学院の100年』が刊行された。その編集途上に

同委員会の山本栄一委員から「粉碎か創造か一旗の章」のゲラが手渡された。同時代に学生・院生であった立場からコメントを求められた。どのようなコメントをしたかは記憶にないが、記憶にあるのはこの時代の学生運動を「紛争」と呼ぶか、「闘争」と呼ぶかであった。前者は大学側の立場を示し、後者は学生の立場であった。私は後者を支持し、せめて「紛争」と括弧をつけることを示唆したが、最終的には括弧なしの「紛争」であった。

さらに、1991年6月、『関西学院史紀要』が学院史資料室から刊行され、この創刊号で、上記図録へのコメントの中で指摘したのは、新たに編纂される『百年史』で実現すべき課題として、1)「教育・研究機関としての関西学院・学部が、日本の学校史・教育史・内外の学界での位置づけ」、2)従来の学校史の多くが「上からの学校史」であったことを反省し、生徒・学生・職員・教員の生活史を描くこと、3)教育機関としての関西学院が「出来得なかったこと、為すべきでなかったこと」を歴史的に反省し記録すべきこと、これらである。

(3) 『百年史』執筆への参加

1990年関西学院100年史編纂委員会が、翌年には関西学院百年史編集委員会が設置され、井上も委員を委嘱され、学院史資料室がその事務局となった。

『百年史』公刊以前の『開校四十年記念』（村上謙介）、『五十年史』（武藤誠）、『六十年史』（武藤誠）、『七十年史』（大道安次郎ら3名）が示すように編集委員会形式を採りながらも主たる編集・執筆は個人が担っていたが、今回の場合、14名の編集委員が各章の項目単位で執筆し、互いに草稿に目を通し、完成原稿とした（井上の担当は全10章中7章の項目を担当）。

この編集・執筆に際しては、学校史・自校史が「一つの学問分野を構成する」当時の状況を踏まえ、「客観的な資料批判に基づく実証的アプローチを基本」に、1)「一私学の歴史の枠組みに留まることなく、日本近現代史、教育史、教育行政史との関連を重視し」、2)「建学の精神を考察し、キリスト教主義学校としての学院の歴史像を組み立てる」、3)本学の「教育・研究が果たしてきた役割の再認識とともに、将来への展望を明確にする手掛かりとなる提言や問題提起ができないかを模索すること」とした。その結果、

『関西学院百年史』は、資料編2巻、通史編2巻の全4巻が1998年に全巻刊行され、翌1999年に『関西学院百年史1889-1989 通史編索引』（訂正一覧含む）が刊行された。

なお、全巻刊行後、中野実〈東京大学・大学史史料室〉「学校史は広義の精神史—『関西学院百年史』に寄せて—」、文学部の海老坂武「大学と私—『関西学院百年史』を読む—」、総合政策学部の藤田太寅「ランバスの頃のキリスト教伝道—『関西学院百年史』を読む—」が『関西学院史紀要』（第6号、2000）に掲載されている。

（4）関西学院における学校史の刊行の特性

このような関西学院の年史編纂・出版の特徴の一つは、各学部・部局史として『関西学院高等商業学部二十年史』（1931）を皮切りに、『関西学院事典 増補改訂版』（2014）までに18点、それ以降4点の計22点が出版されており（詳細は「関西学院史」『事典』85頁。なお、『関西学院大学心理学研究室80年史（1923～2003）』（2012）への言及はない）、さらに2014年以降『関西学院大学図書館史』（2014）、『世の光たれ！：関西学院高等学部商科開設100周年記念誌』（2014）、関西学院大学博物館編『Gift for the future: 未来に贈る125年：1889-2014』（2014）、『Thy Will Be Done—聖和の128年』（2015）など多様な学校史が編纂・刊行されていることであろう。また、学内の生徒・学生の課外活動を描く部誌については、以下の『関西学院事典』に示されている。

（5）『関西学院事典』（2001）

本書の出版計画は、当初百年史編集の継続事業として法人に提案したが、受け入れられることなく、同委員会が1998年3月に解散した。しかし、第二ミレニアムを記念した創立111周年記念事業を実施するとの法人の方針に沿って、学院史資料室が同事業に応募し採択され、2000年「学院史資料室」が「学院史編纂室」に改組され、休刊していた『関西学院史紀要』の継続発刊が計画され、翌月関西学院事典編纂委員会と同編集委員会が立ち上げられた。

この『関西学院事典』刊行のアイデアは「座談会 関西学院百年史を考える」（『関西学院史紀要』創刊号）の中での山本栄一経済学部教授の発言（206-207頁）によるもので、歴史も人物名も何でも出てくる『関学事典』の刊行（2001

年に刊行）であった。「この時は夢であった」この事業を実現できたのは、「心意気だけが問題だ」と指摘し、山本学院史編纂室長の「心意気」とその「心意気」にほだされ、「エンジンをかけた」井上であり、それを支えたのはすでに広報室に移籍していた川崎啓一氏の招聘であり、『百年史』、その通史編の『索引』から協力をあおいでいた辻美己子氏の続投であった（『編集後記』）。また、『百年史』編集・執筆中の成果を生徒・学生に還元するために1995年以降「『関学』学」を開講し、「建学の精神」の生徒・学生への継承の徹底であった（井上「いかにして大学の『建学の精神』を伝えるか—『『関学』学』の位置づけと意義—」『日本大学史紀要』〈11〉2009）。

聖和大学（2009）、千里国際学園（2010）との法人合併、言語コミュニケーション文化研究科（2001）、司法研究科（2004）、経営戦略研究科（2005）、理学部の理工学部への改組（2002）、人間福祉学部（2008）、教育学部（2009）、国際学部（2010）、初等部設置（2008）など学院内の拡大・発展を紹介する必要性から、創立125周年記念事業の一環として、増補改訂版を出版した（2014）。この増補改訂版のWebによる公開は、その初版の編集・執筆段階から計画されたものであった。本学学校史がこのような形で公開されたのは、きわめて先駆的な試みであった。

（いのうえ たくとし）

